

# 日本行動分析学会ニューズレター J - A B A ニュース

2004年 春号 No.34 (4月8日発行)

発行 日本行動分析学会 理事長 中野良顯

〒102-8554 東京都千代田区紀尾井町7-1 上智大学文学部心理学科学習心理学研究室内

FAX:03-3238-3658(日本行動分析学会事務局と明記) URL:http://www.behavior.nime.ac.jp/~behavior/

## 日本行動分析学会2003年度総括

2004年度学会賞について.....	清水直治
編集委員会より.....	眞邊一近
教育システム整備委員会より.....	藤原義博
海外だより.....	小野浩一
ELS(電子図書館サービス)の収録状況と、ELSの今後について.....	藤 健一
学会情報 / 常任理事会ヘッドライン.....	中野良顯
学会情報 / 会員情報.....	事務局
編集後記.....	藤 健一

## 日本行動分析学会2003年度総括

### 「行動分析学研究」編集委員会

前編集委員会によって発刊された行動分析学研究17巻1号と2号および、新編集委員会による18巻1号の出版を終え、現在18巻2号の編集作業に取り掛かっている。投稿論文数は順調に増加しつつあり、論文のテーマの領域がさらに広がることを期待している。来年度は、査読過程をよりスピードアップし、年2冊の発刊を堅持したい。基礎系の論文の投稿が応用系に比べて少ないので、特集号などの手段により、基礎系論文を発掘したいと考えている。また、基礎と応用の橋渡しをするようなブリッジ研究の投稿を歓迎している。(担当理事 眞邊 一近)

### 国際・渉外

国際渉外担当は、本学会の上部団体であるABAとの連絡役や、海外からの問い合わせに対する応答、海外との連絡にかかわる本会会員からの問い合わせに応じている。それによって会員の国際的な活動を支援するとともに、日本の行動

分析学の情報を海外に提供している。2003年度におこなった事業は以下の通りである。

1. ABA に対し 2002 年度の J-ABA 事業報告書ならびに 2001 年度事業計画書を提出した(2002 年 4 月)
2. ABA2003 大会(於サンフランシスコ)の ABA Expo において、J-ABA の活動を紹介するポスター展示を行った(2003 年 5 月)
3. ABA2003 大会 期間中に開催された International Development Committee ならびに Affiliation Chapter Meeting にリエゾンとして出席した(2003 年 5 月)
4. ABA2003 大会期間中に開催された 2004 年の国際大会の準備会に出席した(2003 年 5 月)
5. 「第2回日本在住学生会員 ABA 参加助成事業」における、公募・選考を推進した。

(担当理事 杉山 尚子)

事務局

現在の学会運営における財務と人事上の問題は次の通りである。1) 学会印刷費は年間で300万、これにニューズレターの印刷費ならびに編集関係費と郵送費を加えると約370万程度になる。年度会費は一般が7000円で500名で計算して350万、学生会員は4000円で100名で計算して40万であるので、390万の収入に対して、そのほとんどが学会誌を中心とした事業に使われていることが分かる。2) この他に学会では事務局費に約90万、学会事業補助費に60万、会議費その他に90万で約240万の支出がある。当然のことながら、これでは財務上破たんすることになる。なぜそうならなかったかといえば、学会誌が2冊きちんとでなかったり、過去の繰り越し金を取り崩してきたからである。3) 財務上の急務は、学会誌を2冊出した上で、学会として十分な活動ができるような健全な財政状況にすることである。そのためには、会費の完全納入、事業による増収、支出の見直しが必要である。その上で財政の好転が見られないならば、近い将来、年度会費の値上げも検討する必要があるか

もしれない。4) さらに深刻なのは事務局の状況である。上で述べたように約90万が事務局費となっているが、そのうち給与には36万しか払われていない。これは月割りにして3万、時間給を仮に900円で計算すれば、延べ時間、月33時間強で週当たり8時間程度である。これを余裕のある人事計画と見るのは難しい。5) この余裕の無さはどこにしわ寄せがいつているのであろうか。もちろん、理事長をはじめとする関連大学の研究者の負担があるが、それを別にしても、編集、企画、ニューズレター等の担当常任理事のところに、実質的な負担の分担がなされている。6) このような点から、事務局のあり方、アウトソーシング、事務手続きの簡素化の検討が始まっている。特に最後の問題では、インターネットを用いたe学会の可能性が問われているが、メールアドレスをもたない会員へのサービスをどうするか等難問が多い。学会の一層の発展に向けて、これらの問題に対する会員諸氏の御意見を是非事務局に寄せてほしい。

(担当理事 坂上 貴之)

## 2004年度学会賞について(続報)

学会賞担当常任理事 清水 直治

日本行動分析学会では、現在、2004年度日本行動分析学会『学会賞(実践賞)』及び『学会賞(論文賞)』の選考手続を進めております。

『学会賞(実践賞)』につきましては、前号のニューズレターでお知らせいたしましたように、会員の皆様に、候補者の推薦をお願いいたしましたところ、選考対象となる何人かの推薦をいただき、2月14日をもちまして、すでに候補者の推薦を締め切らせていただきました。

また、『学会賞(論文賞)』につきましては、選考規程によれば、『行動分析学研究』第18巻1号及び第18巻2号に掲載されたすべての論文のうちで、「基礎、応用、あるいは理論的分析に関して、次の研究の弁別刺激となるような、画期的かつ独創的な研究」が選考の対象となります。従いまして、第18巻2号の発刊をまっ

具体的選考手続に入りたいと思います。

なお、それぞれの学会賞の選考委員につきましては、選考規程にしたがって、すでに決定をさせていただいております。

今後の予定としましては、選考規程に則って、それぞれの学会賞の選考委員に所定の期日までに投票をしていただき、6月に開催される常任理事会において開票を行い、『学会賞(実践賞)』及び『学会賞(論文賞)』の受賞者(あるいは組織)を決定いたします。

そして、それぞれの学会賞の受賞者につきまして、2004年9月4日・5日に帝京大学において開催される日本行動分析学会第22回年次大会におきまして、授賞式を行うとともに、受賞講演をしていただく予定です。なお、受賞者(あるいは組織)には、1件5万円の賞金が贈呈さ

れます。

\* \* \*

日本行動分析学会『学会賞(実践賞)』及び『学

会賞(論文賞)』の選考規程等について、さらに  
詳細をお知りになりたい場合には、学会 HP でご  
らんになれます。

## 編集委員会より

行動分析学研究 編集委員長 眞邊 一近

2003 年度より「行動分析学研究」の新編集  
委員による編集作業がスタートして、早 1 年が  
過ぎました。2003 年 4 月から 2004 年 2 月まで  
に投稿された論文数は 15 編、受理論文数 9 編、  
審査・修正中論文数 6 編になります。皆様のさ  
らなる投稿をお待ちしています。

スピーディーな学会誌実現のため、投稿論文  
の査読課程でのやり取りを e-mail で行う電子  
投稿・電子査読を導入しました。具体的には、  
Word や一太郎、あるいはテキストファイルでお  
送りいただいた原稿を、pdf ファイルに変換し  
て 2 名の査読者に送付しています。査読結果も  
pdf ファイルで著者にお送りしています。特に  
大きな問題は生じていませんが、機種依存文字  
を使用した論文の場合文字化けが生じ、査読に  
支障が出る場合があります。また、最終受理後  
の英文校閲ならびに印刷所への送付も電子ファ  
イルにて行われています。この場合も、文字化  
けが支障になります。論文を投稿される場合は、  
機種依存文字の使用はお避け下さい。機種依存  
文字については、以下の URL をご覧下さい。

[http://support.biglobe.ne.jp/help/faq/char  
actor/izonmoji.html](http://support.biglobe.ne.jp/help/faq/character/izonmoji.html)

なお、論文の投稿は、  
manabe@gssc.nihon-u.ac.jp に添付ファイルに  
て直接投稿されても構いません。正常に受領し  
た場合は、数日中に必ず受領メールを送信しま  
すので、受領のメールが届かない場合はお問い

合わせください。また、査読結果も e-mail でお  
送りしていますので、受領された場合は必ず受  
領のメールをご返信ください。ご協力をお願い  
申し上げます。

現在、18 巻 2 号の編集作業中ですが、この号  
には行動分析学関連の 2002 年度の卒業論文・修  
士論文・博士論文リストを掲載する予定です。  
若手の研究を広めていくと共に、研究者間の交  
流を促進することを期待しています。19 巻 1 号  
あるいは 2 号には 2003 年度の論文リストを掲  
載しますので、ご自身のあるいはご存知の大  
学・教育機関での論文リストを e-mail の添付  
file (Text, Word, 一太郎のいずれか) か、本  
文への直接書き込みでお送りいただければ幸い  
です。リストは、1) 大学・教育機関の名称、2)  
博士・修士・学部・短期大学の別、3) 著者名、  
4) 論文タイトル、5) 指導教員名、6) 連絡先  
(e-mail address 等) の順でお書きください。  
なお、行動分析学に関係するかどうかの判断は、  
お送りいただいた方の判断に従う予定ですので、  
ご自身が関連すると思われるものをお送りくだ  
さい。また、「連絡先」には、この論文に関す  
る問い合わせが可能な方の連絡先をお書きくだ  
さい。指導教員の方が適切であれば指導教員の  
連絡先をお書きください。公表に問題がある項  
目については空白のままお送りください。会員  
の皆様の投稿をお待ちしています。

## 教育システム整備委員会より

担当常任理事 藤原 義博

本委員会は、中野理事長の行動計画に基づい

て、わが国の行動分析学研究の一層の振興を計

ることを目的に設けられたものです。大学院生や学部生が海外に留学しなくても国内で行動分析学を学べるように、国内の大学院等の教育機関におけるカリキュラムや教材を整備充実させ、その情報を広く開示することなど、教育環境の整備に寄与することが本委員会に求められている行動目標です。戦略的に、国内の大学院に行動分析学関係の研究者を配置することや複数の大学が連携して授業や学生指導体制を確立することなどを目標とした「大学院教育整備充実委員会」(小林担当)と、大学院レベルの行動分析カリキュラムについての調査やカリキュラムモデルの開発等を検討する「行動分析カリキュラム検討委員会」(園山・藤原担当)の2つの下部委員会で構成されています。

現実的には困難な課題を背負った委員会です

ので、初年度は具体的な活動を起こすことはできませんでしたが、手始めに、本学会のホームページに掲載されている「行動分析学が学べる日本の大学・研究機関」と「行動分析学関連の情報(国内)」の研究会・関係機関の情報の整備・拡充を行いたいと計画しております。具体的には、16年度早々に学会員にメールにて、改めて各大学における行動分析学関係の授業シラバスやゼミ内容、研究内容を調査し、各地で行われている研究会や勉強会などの情報提供をお願いすることを予定しております。これらの情報をホームページ上でマップにして掲載するなど、より活用しやすいように工夫してみたいと考えております。その節には、皆様のご協力をよろしくお願い致します。

## 海外だより

### ウェールズの人と自然、そして行動分析

駒澤大学文学部 小野 浩一

2003年3月下旬より在外研究でイギリスのウェールズ大学に滞在している。ウェールズ大学はウェールズ内に6校あるが、私がいるのは、Bangor(ウェールズ語のアクセントでバンゴール)校である。ロンドン、ユーストン駅からバンゴールへの直通列車は日に3本、あとはパーミングムの北にあるクルーという駅の隅にある小さなホームで2~3両編成のジーゼルカーに乗り換える。ロンドンからの所要時間は、早くても4時間、遅い場合は5時間ほどであるが、しばしば遅れや運休がある。初めてこの地に来て来た昨年3月、クルーを出た列車がリバプールの手前で大きく西へ進路を取り線路がアイリッシュ海沿いに出ると、車窓にはまだ冬枯れの残る牧場と荒涼とした海岸線が続くようになり、私はかつて訪れた北海道のオホーツク海沿岸や青森県下北半島の太平洋沿岸を思い出した。

バンゴールは北部ウェールズの中心地で、人口14,000人ほどの小さな大学町である。2つの丘の谷あい町に町の中心部が細長く広がり、その

突端にアイリッシュ海に臨む栈橋がある。海が近いので、そこかしこにカモメが飛び交い鳴き声が響いている。北側の丘はメナイ海峡を挟んでアングルシー島と対面しており、そのアングルシー島の西端部のホーリーヘッドからはアイルランドのダブリンに行くフェリーが出ている。私が住む南側の丘はなだらかな羊の牧場からさらにアーサー王伝説のスノードン連峰へと続いている。

ウェールズは日本でいうと四国程度の小さな地域であるが、それでも北と南では大分異なる。南部はウェールズ1の都市カーディフや第2の都市スウォンジーを擁し、産業革命の頃は石炭の搬出港として栄え、現在でも日本企業を含む多くの企業が進出し経済基盤も安定している。一方、北部は農業畜産が主で雇用をもたらすような産業は少なく失業率も高い。気候も北ウェールズは北アイルランドやスコットランドと同じ気候帯に入ることが多く、南ウェールズや南イングランドに比べるとやや寒冷である。昨夏

のような猛暑の時でも暑いロンドンから汽車に乗りバンゴールの駅に降り立ったときは、高原のような涼しさを感じたものである。

ウェールズ大学バンゴール校はイングランドの伝統校とは多少異なる来歴がある。それはかつて北ウェールズの数少ない産業の1つであったスレート産業の労働者たちの寄付金によって創設された大学だということである（ちなみに経営者は今ではナショナルトラストが保有し観光名所になっている立派なお城を建てている）。1884年に10人の教員と58人の学生でスタートした大学は今では、教員917名、学生数約8000名の総合大学になった。大学施設は2つの丘とそれにはさまれた谷に散在する62の建物からなり、北側の丘の上に建つメインアートビルディングと呼ばれている校舎は、1911年に建てられたルネッサンス様式の建物で町のどこからでも見える大学の象徴である。

心理学部の施設は3箇所あるが、中心となるのはメインアートビルディングの隣にある近代的な3階建ての建物である。現在、アカデミックスタッフが84名、学生数は学部学生が669名、大学院生164名の833名である。心理学部の研究領域は、臨床・健康心理学、消費者心理、認知神経科学、言語学習・発達等に分かれており、行動分析学の研究は言語学習・発達部門に属している。行動研究を推進しているメンバーはファーガス・ロー（Fergus Lowe）、ポーリン・ホーン（Pauline Horne）と、後は比較的若いニール・ダグデイル（Niel Dugdale）、カール・ヒューズ（Carl Hughes）、ミヘラ・アルヤベツ（Mihela Erjavec）それに大学院生で、人数的にはそれほど多くはない。

ウェールズ大学バンゴール校における行動研究は1963年の心理学科の創設とともに始まった。創設時のメンバーは初代心理学科主任教授であったティム・マイルズ（Tim Miles）とピーター・ハーゼム（Peter Harzem）である。マイルズは理論的・概念的分析が専門でとくに哲学者ライルや現象心理学者ミショットの影響を強く受けたとのことであるが、スキナーの著作や行動分析学にも造詣が深い。ライルはその著「The concept of mind」の中で「Thinking is

identical with saying」と書くようにその立場は行動主義的である。マイルズは現在は名誉教授として心理学棟に隣接する建物に研究室を持ち相変わらず精力的に仕事をしている。

実験的研究はハーゼムによってその基礎が作られた。初期はラットを用いた強化スケジュールの基本的パラメータや嫌悪統制についての研究が中心であったが、その後、ハトによる実験も行われるようになった。その動物実験室は10年ほど前に閉鎖され今はない。ハーゼムはまた、マイルズと共著で「Conceptual issues in operant psychology」という本を書いている。

ローは1970年にアイルランド、ダブリンのトリニティカレッジを卒業した後、ウェールズ大学に来て、ハーゼムの指導のもと1974年に博士の学位を取得した。その後数年してハーゼムはアメリカに移り、それと前後してホーンが学生としてやってきた。これ以降のウェールズ大学の行動研究は、ローとホーンの2人が中心となって推進してきた。

ローは初期のラットやハト、幼児による実験的研究から最近のネイミングやシンボリック行動の研究まで実に丹念に基礎研究を行っているが、その研究の背景になっている基本的な関心は、動物と人間の違いの源泉を探ることであると言う。それが彼の言語に関するさまざまな研究に繋がっている。ローが1979年に本の1章として書いた「Determinants of human operant behavior」からは私も多くのことを学んだ。ローは現在、心理学部長に加えて昨年の秋から大学の副学長に就任し、ますます多忙である。

行動研究グループが現在進めている研究は、1つは幼児を対象とした言語獲得に関する基礎過程、具体的には聞き手行動、カテゴライゼーション、模倣等についての実験的研究で、いずれもHorne and Lowe(1996)のネイミング理論に基づくものである。研究は学部付属のティル・ナ・ノグ（Tir na n-Og: ケルト神話で「子どもの国」という意味）という名前の研究設備の整った保育施設で実施される。かれらのネイミング理論についてはJEAB誌上でも「いまさらそのような用語が必要か？」など否定、肯定

さまざまな議論が展開されたが、私がそのことをホーンと最初に話したときの彼女の言葉は「もうこりごりだわ」というものだった。「こりごり」に相当する英語が何であるか知らないが、もう2度としたくないといった意味のいくつかの言葉からの意識である。しかし、私が「あの中にレスポンド行動が入っているのは画期的だ」と述べると「そう、そう、それがミソなの」とうれしそうな顔をした。これも“soybean paste”と言ったわけではない。

ローとホーンが推進するもう1つの研究プロジェクトはバンゴール・フード・リサーチと呼ばれているもので、子どもの野菜、果物の摂取を促進させようとするものである。この研究実践の背景には、イギリスの子どもの野菜、果物の摂取率が他のヨーロッパ諸国と比較して低く、それによってさまざまな健康障害もたらされているという問題がある。楽しいキャラクターが登場する行動変容プログラムで、すでにイギリス各地の保育施設や小学校で大きな成果を上げている。

ちなみに、子どもが野菜、果物を食べないのは、イギリス人のライフスタイルや家庭での食生活に問題があるらしい。多くの人々が口を揃えて言うには、例外はあるが、大多数のイギリス家庭では家族揃って食事をとることは少なく、各自が好きなきときに冷蔵庫に入っているものや

その辺にあるものを取り出して食べるのが普通なのだそうである。従って、冷凍食品やいわゆるジャンクフードが多くなり、結果として野菜、果物の摂取機会が少なくなるということである。こちらに来る前に、イギリスにホームステイした複数の日本人学生から「粗末なものを一人で食べさせられた」という話を聞いたことがあったが、それが普通なのだと知っていれば彼らの印象もずいぶん違ったものであったであろう。

さて、私のウェールズ滞在もあと1カ月あまりとなった。この間、私は自分自身が被験体となって生体が新しい環境に適應する過程をつぶさに観察することができた。行動は徐々にスムーズになり、「I'll be back in 5 minutes.」は1分から30分までのVIスケジュールであることも知った。イギリスがそして、特にウェールズが抱えているさまざまな問題も身近なものとなった。そして、今ではバンゴールの人々や自然に対して打ち解けた親しみを感じるようになった。北ウェールズの冬は厳しく、短い日照時間に加えて雨の日や風の強い日が多いが、春から夏にかけての北ウェールズは、鳥の声が響き、水仙、ブルーベル、フォックスグローブが咲き乱れ、草原や空の広さ、海の明るさなど輝きばかりの美しさであった。私はいま帰国を前にして、この地を離れがたく感じている。

(2004年2月記)

## ELS(電子図書館サービス)の収録状況と、ELSの今後について

担当常任理事 藤 健一

(1)2004年4月現在、ELSにおける「行動分析学研究」と「大会発表論文集」の収録状況は、次のとおりです。「行動分析学研究」は、第1巻(1986)から第17巻(2002)までが収録されました。また、「大会発表論文集」も、第1回大会(1983)から第20回大会(2002)分までが収録されました。

(2)さる2月23日に国立情報学研究所において、平成15年度電子図書館サービス連絡会議が開催され、登録242学協会のうち142学協

会が出席しました。そこでの大きな議題は、次のとおりです。2005年(平成17年)から、現在のELS、NACSIS-IRにかわって新情報提供サービス「NII 学術コンテンツ・ポータル(GeNii (ジーニイ))」が始まります。現行のELS、NACSIS-IRは2005年3月(平成16年度末)をもってサービスを終了します。

新サービスのGeNiiと現行のELSとの違いを簡単にまとめると、次のようになります。

GeNii サービスを提供する情報学研究所が、

大学や企業などの機関とサイトライセンス契約（定額制）を結び、その機関（図書館など）の利用者が GeNii で提供する論文情報サービスを利用可能となります。つまり、現行の ELS では、サービスの利用者が印刷件数などに応じて著作権使用料（有料の場合）を学会に支払っていたのに対して、新サービスでは、サイトライセンス契約を結んだ機関（大学など）が、情報学研究所に使用料を支払うこととなります。このため、論文情報サービスの利用者本人が使

用料について心配する煩わしさがなくなります。

著作権使用料の支払い方式については目下検討中とのことですが、情報学研究所のサイトライセンス契約料金収入の中から、学会の収録論文記事のダウンロード実績に対応した配分方式により、学会に支払われることになりそうです。

行動分析学会においても、2004 年の夏までに、新サービスへの対応を検討する予定です。

## 学会情報

### 常任理事会ヘッドライン

理事長 中野 良顯

#### 1. 第 5 回、第 6 回常任理事会

第 5 回常任理事会は、12 月 21 日（日）に、第 6 回常任理事会は、2 月 8 日（日）に開催されました。2003 年度の常任理事会はこれで全て終了しました。

#### 2. 会員数（2004 年 2 月 8 日現在）

637 名（一般 501 名、夫婦 8 名、学生 124 名、購読会員 3 名、賛助会員 1 名）。

#### 3. 機関誌の発行予定

大変お待たせしました。『行動分析学研究』第 18 巻第 1 号が 2 月末に刷り上がり、発送させていただきましたが、皆様のお手元に届きましたでしょうか。現在は、第 18 巻第 2 号を 4 月上旬に刊行するため、編集作業が進められています。

#### 4. 2004 年度会費納入のご案内

おかげさまで持ちまして、2003 年度の会費納入率は 8 割を超え、順調な学会運営がなされています。誠にありがとうございます。さて、次年度 2004 年度の会費納入につきましては、

3 月 31 日の期日までに所定の金額をお支払いください（一般会員 7000 円、学生会員 4000 円）。期日内にお支払いいただいた方には、次年度年次大会（帝京大学 9 月開催）において抽選を行い、その中で当選した方に全額会費をお返しいたします。皆様どうぞふるって期日までに会費をご納入くださいませ。なお、学生会員の方は 4 月中に、科目等履修生 / 聴講生 / 社会人学生であることを示す 2004 年度の在学証明書 / 学生証のコピーを学会事務局宛てにお送りください。

#### 5. 公開講座のお知らせ

今回はありません。

#### 6. 住所変更やお問い合わせはメールでお気軽に

学会事務局では、新入会員のお申し込みや会員の皆様の住所・連絡先変更などにつきまして、電子メールでもお受けいたしております。お気軽にメールをお送りください。アドレスは次のとおりです。yoshia-n@sophia.ac.jp

## J - A B A ニュース編集部より

書評、研究室紹介、施設・組織紹介、用語についての意見、学会に対する提案や批判、求人情報、イベントや企画の案内など、さまざまな

記事を募集しています。原稿はテキストファイル形式で電子メールかフロッピー（DOS）で、下記のニューズレター編集部宛にお送りください。

なお、ニュースレターに掲載された記事の著作権は、日本行動分析学会に帰属します。掲載された記事は、日本行動分析学会ホームページでの公開を原則としていますので、ホームページ上での公開を望まない事項（例えば、電子メールアドレスなど）のある場合には、あわせてニュースレター編集部までご連絡下さい。

〒603-8577 京都市北区等持院北町 56-1  
立命館大学文学部心理学研究室気付  
日本行動分析学会ニュースレター編集部  
藤 健一  
( e-mail: fuji@lt.ritsume.ac.jp  
電話 075-466-3193)